

主日礼拝説教「毒麦？ 歓迎します！」

日本基督教団石神井教会 2017年9月3日

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章18～25節

¹⁸現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りない
とわたしは思います。¹⁹被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。²⁰被
造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方
の意志によるものであり、同時に希望も持っています。²¹つまり、被造物も、いつか滅びへ
の隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。²²被造物
がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは
知っています。²³被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子
とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。
²⁴わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望
は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。²⁵わたしたちは、
目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 13章24～43節

²⁴イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。
ある人が良い種を畑に蒔いた。²⁵人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔い
て行った。²⁶芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。²⁷僕たちが主人のところに来て言
った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が
入ったのでしょうか。』²⁸主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、
行って抜き集めておきましょうか』と言うと、²⁹主人は言った。『いや、毒麦を集めると
き、麦まで一緒に抜くかもしれない。³⁰刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。
刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』
と、刈り取る者に言いつけよう。』」

³¹イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似てい
る。人がこれを取って畑に蒔けば、³²どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よ
りも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」³³また、別のたとえをお
話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、
やがて全体が膨れる。」

³⁴イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは
何も語られなかった。³⁵それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであ
った。

「わたしは口を開いてたとえを用い、天地創造の時から隠されていたことを告げる。」

³⁶それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちがそば
に寄って来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。³⁷イエスはお答えに
なった。「良い種を蒔く者は人の子、³⁸畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の
子らである。³⁹毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は
天使たちである。⁴⁰だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそう
なるのだ。⁴¹人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者ども
を自分の国から集めさせ、⁴²燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣
きわめいて歯ざしりするだろう。⁴³そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝
く。耳のある者は聞きなさい。」

だれが毒麦？

今日の福音書日課は、主イエスが「収穫」に関連するたとえをいくつもお語りになられて、「天の国」のことをお教えくださっているところです。13章全体をひとまとめに、そう言うことができますが、今日の日課は、そのうちの中間部、「毒麦のたとえ」と、その「毒麦のたとえの説明」と呼ばれる段落に囲まれた部分です。この箇所の前には、有名な「種蒔きのたとえ」と「種蒔きのたとえの説明」と呼ばれる段落が置かれていて、両方を通して、種を蒔くことや実りを結ぶこと、そして収穫することを題材にして、主イエスが「たとえ」をお語りになられていることが分かります。主イエスは「大工の息子」で、実家は農家ではありませんでしたが、恐らく、だれにでも経験的に分かる題材として、このような「たとえ」をお語りになられたのでしょう。

「毒麦のたとえ」は、マタイ福音書だけが伝えているものです。四つの福音書、あるいは共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）が揃って伝えている主イエスの教えとは違って、最初の時代の教会では必ずしも重要なものと考えられなかったのかもしれない。けれども、逆に言えば、このマタイ福音書を生み出した教会では、「毒麦のたとえ」が大切で不可欠な主イエスの教えとして、語り伝えられていたということでしょう。つまり、マタイの教会には、特に心して取り組まなければならない特別な課題があった、ということです。

それは、もしかすると、教会における「毒麦のような存在」の問題だったのかもしれない。教会の純粋性が脅かされるような存在、あるいは、教会の同質性が脅かされるような存在に対して、どのように向き合うべきか、という問題です。

わたしたちは、今、キリスト教会に集まってきています。そして、ほとんどが、キリスト信者です。教会の礼拝に集まってきた私たちは、自分たちが洗礼を受けたキリスト信者であることを、この後に執り行う「聖餐」のパンと杯に共にあずかることで、わざわざ明らかにすることさえします。そのようにして、信者と信者以外とをあえてはっきりと分けて見せてさえいるのです。そのようにして、或る意味でキリスト教会としての同質性、純粋性を強調することさえしています。それはもちろん、キリスト教に限らず、多くの宗教で見られる傾向かもしれません。一つの宗教的な営み、一つの信仰の形を共有するからこそ、そこに一つの宗教が成り立つわけです。そして、それは、時に、内と外の境界線を強く意識して、外の者を排除しようとする行動に向かうことがある。「毒麦は抜いてしまえ！」というのです。

主イエスは、ユダヤ教という共同体の中で、その問題に直面されました。そして、この「毒麦のたとえ」を語られたのかもしれない。マタイ福音書のマタイは十二弟子の一人ですが、そのマタイは「徴税人」という職業で、当時のユダヤ人社会の中では「罪人」と並んで、ユダヤ教の共同体から排除されている人でした。その徴税人マタイを、主イエスはご自分の弟子にされて、彼ら徴税人や「罪人」と呼ばれる人々と一緒に食事をするということをした。普通のユダヤ人ならば避ける人々と共に食事をされたのです。

共に成長する

マタイ福音書は、主イエスがユダヤ人社会の中で向き合われた問題に、今度は、教会という共同体の中で向かっていたのかもしれませんが。教会に加わる人が増え、しかし、かつての弟子集団のように見える姿の主イエスがいてくださるわけではない。そういう中で、必ずしもカリスマ的な指導力のあるリーダーが立てられるとは限らない教会には、いろいろな考えの人が加わり、たとえ信仰は一つだと言っている、さまざまな営みをする上で意見が対立したり、教えの理解が相違したりということが生じるようになっていたのではないのでしょうか。そして、対立が増せば、異質な者を拒み、純粋なものを求めて、「だれが毒麦か？」と問い、「毒麦」を排除しようとするようなことも、起こっていたのかもしれませんが。

そのような中で、マタイの教会の人々は、主イエスの「毒麦のたとえ」を思い出し、心に留め、自分たちのあるべき生き方、教会のあるべき姿を、繰り返し問い直したのではないのでしょうか。

もっとも、わたしは、マタイの教会の人たちが、この主イエスの「毒麦のたとえ」を、深刻な顔をして語り継いでいたとは思えません。むしろ、主イエスの快活で聞く者を楽しませるような物言いを真似ながら、このたとえを語り継いだのではないかとさえ思うのです。というのは、このたとえは、どこかユーモラスな語り口を感じさせるところがあるからです。

主イエスは、ある人が良い種を畑に蒔いたら、唐突に敵がやって来て、毒麦を蒔いて行くと、物語られます。それは、普通にあるようなことだったのでしょいか。しかし、そうだとしたら、毒麦が芽生えてきたときの僕たちの反応は、少し間抜けすぎます。「畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか」とは、暢気な話です。しかも、それに対して主人は、即座に「敵の仕業だ」と断言するにもかかわらず、僕たちに毒麦を抜き集めさせるのでもなく、敵に報復するわけでもない。そのままにしておけ、というのです。

考えてみれば、ここで「敵の仕業だ」という主人の断言にも、あまり深刻さが感じられないと思います。それは、わたしたちがこのマタイ福音書を順に読んできているからでもあるでしょう。主イエスは、この福音書の5～7章に描かれていた「山上の説教」の中で、おっしゃられていたのです。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(5:44)。そうお教えになられていた主イエスがお語りになられた「敵の仕業だ」という言葉は、わたしには、「愛する敵の仕業だ」というようにさえ聞こえてくるのです。敵愾心ではなく、愛と憐れみに満ちた「敵の仕業だ」という言葉。そうと気づかせるようなユーモラスな語り口調の「たとえ」だからこそ、「毒麦のたとえ」は、難しい課題を問うものでありながら、教会で語り継がれるようになったのだと思うのです。

「行って抜き集めておきましょうか」と進言する僕たちに、主人は、「いや」と言います。「両方とも育つままにしておきなさい」と言うのです。この言葉は、「共に成長する」という一語で言われています。自分たちの蒔いた良い種の麦も、敵の蒔いた毒麦も、共に成長させよう。それが主の御心、天の父の御心なのです。

良い種は蒔かれる！

「ドクムギ」は、ムギに似たイネ科の植物ですが、必ずしも毒性があるわけではないそうです。牧草としてわざわざ生えさせる場合もあるそうですが、人間の食物としては好まれず、たいていは「雑草」扱いされるもののようです。

雑草ですから、きっと「敵」がわざわざ蒔きに来なくても、麦畑の中に勝手に生えてきてしまうこともあったでしょう。そのような場合、雑草のほうが強いのです。だからこそ、雑草は抜かなければいけないというのが、農業をする上での基本になる。本当に育てたい物から栄養を奪ってしまうし、放っておけば、世話や刈り入れのときに余計な手間をかけなければいけなくなります。そういう意味では、このたとえで、主人が「毒麦を抜き集めなくてよい」というのは、本来の農作業の常識から言えば、あり得ないことです。それでは、農場経営者として失格です。もちろん、このたとえを、主イエスは、農場経営のノウハウとしてお語りになられたのではなかったでしょう。あえて言えば、教会共同体経営のノウハウとしてお語りになられたと言うことはできるかもしれません。マタイ福音書の教会は、そのように受けとめて、語り継いでいたのだらうと想像できます。

雑草のように知らぬ間に生えてきて、わたしたちの足もとに絡みつくように伸びてくる「毒麦」。それは、しかし、わたしたちの外にあるものとは限らないかもしれません。わたしたちの内にもある。内なる「毒麦」がある。いいえ、わたしたちは皆、もともとは「毒麦」のようなものだったのかもしれません。ところが、そのわたしたち「毒麦」が、ある良い「麦」と共に成長させていただいて、ある時から、いつの間にか良い「麦」に変えられ始めたのではなかったでしょうか。主イエスという一粒の良い「麦」です。

使徒書日課のローマの信徒への手紙を記したパウロは、その主イエス・キリストと、わたしたちは結び付けられ、共に死に、共に新しい命に生きるようにされた、と言いました。「毒麦」も、それまでの姿から新しい命に生まれ変わらされて、「良い麦」になる。それが、主イエスを通して神がお示しくださっている御心だ、ということです。

だからこそ、主イエスが加えてお語りくださっていることに、耳を傾けたいのです。「**良い種を蒔く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである**」。御国の子らというのは、主イエスに従う者、わたしたちキリスト者のことです。主は、世界という畑に、わたしたちを「良い種」として蒔かれるというのです。主が蒔かれる良い種は、たとえ小さな一粒でも大きく成長して、天の国の実りをもたらすものです。そのように蒔かれた良い種は、毒麦と共に成長するようにと、この世に蒔かれたものなのです。そして、キリストに従う者一人ひとりがそういう者であるということは、世にあって教会がそういう存在だ、ということでしょう。「良い麦」は、「毒麦」と共に成長し、「毒麦」を「良い麦」に変えるために、蒔かれるのです。最後には、すべての存在が、良い実りを得るためです。神は、そのことを忍耐して待ち望んでくださって、今ここにも、「良い種」の蒔かれた畑、「教会」を世のうちに置いてくださっているのです。